
精神科デイケアを豊かなりハビリテーションの場に育てるガイドブック

池淵恵美著

金剛出版, A5判 224頁, 3,740円, 2025年10月刊

(小阪病院デイケアセンター) 川合裕子

帯にはこうある, 居場所型と通過型を超えたデイケア運営のポイントを考える。本書は, 著者の精神障害リハビリテーションに関する各論の実践ガイドブック3冊目である。デイケアや病棟でのリハビリテーションの研究に長年携わり, チーム医療が叫ばれるずっと前から多職種チームで取り組んだ経験を基に, デイケアという理解しにくい現場の様子を初心者にも分かりやすく伝えながら, デイケアは何をすることかということではなく, デイケアが何を提供するのかということに目をむけるよう読者を導く。現在のデイケアの課題を突き, デイケアには明確なスタンダードがないと指摘するが, それでもメンバーのリカバリーに必要なものはこれまでのデイケアに存在していたし, これからも生き続けると信じ, 同じ時を過ごしたメンバーとスタッフのそれぞれの体験をリカバリーストーリーとケースノートでたどりながら, メンバー個人の資質と偶然に頼らない支援の構造を浮かび上がらせている。

冒頭ではコンテイナー集団という考え方を図示し, デイケアという集団がメンバー個人のリカバリーの基盤になることを説く。ストーリーとノートではデイケアへの入口の重要性を具体的に示し, 信頼関係を築いた担当スタッフとの継続的な関わりを軸に, 集団の中で生じる焦りや不安, 考え方の癖に共に向き合う様子を細かく描き出す。解説ではデイケアという集団とプログラムの整え方, そしてデイケア後を見据えた利用法を取り上げ, 最後に見落とされがちなデイケア運営の核をおさらいする。Q & Aに進むとシンポジウムに参加しているような感覚が生じ,

デイケアが運営方法によって豊かにも貧しくもなることを実感し、私自身数々の失敗を思い起こしながら、さらなる創意工夫のあれこれに考えを巡らせていた。そして日本のデイケアのスタンダードを形にしたいと切に感じた。

しかし、さらりと読めてしまった場合は要注意である。ストーリーとノートは丹念に作り込まれて密度が高い。何気ない言い回しに隠れるデイケアの本質的な役割を読み解くには、ある程度の知識や基本的な関わりの姿勢を押さえていることが必要だと感じる。そこでお勧めしたいのは、本書をスタッフチームで読むことである。知識や方法を得るのみでなく、ストーリーやノートに隠れている気持ち、何が起きていたのか、初心者はどこに注目し何を感じるか、熟練者の理論的アプローチ、職種の視点の違いや協働の方法など、どんな細かな気づきでも話し合い、共有することがスタッフのトレーニングとなり、それぞれがデイケアの理解を深め、理論を学ぶ機会になるに違いない。この営みこそがデイケアをより豊かなりハビリテーションの場に育てることに繋がると思う。

欲を言えば、デイケアを外部から規定する診療報酬や所属組織との関係性など、デイケアスタッフだけの努力ではどうすることもできない問題にも踏み込んでほしかった。工夫を重ね発展してきたデイケアが医療として生き残る必要性を最も深く理解しているのは、著者その人に違いないのだから。
